

平治物語絵(常磐卷)について

真 保 亨

内 容

- 一 はじめに
 - 二 絵巻各段の構成
 - 三 平治物語諸本との異同
 - 四 平治絵巻諸本との関係
 - 五 鎌倉絵巻に於ける位置
 - 六 結語
- 付 詞 書

一 はじめに

本絵巻は、最近まで旧大名某家の秘蔵していたもので、全く世間に知られていなかったが、現在の所有者の手に移ってから、昭和四十九年秋に行われた東京国立博物館特別展「絵巻」に、はじめて公開され、近時稀にみる本格的な鎌倉時代絵巻の出現として驚きをもって迎えられ、識者の注目を惹くに至った。

古文献・記録の上で、本絵巻を記した例を捜してみると、後崇光院の「看聞御記」応永卅二年十一月四日の条にみる「常磐絵」¹の記事が、或

平治物語絵(常磐卷)について

はこれに当るかも知れないと思われ、また「本朝画図目録」²所収の「常磐之巻」のほか住吉広行によって編せられた「倭錦」に、それらしき項目をみるのみである。摸本としては、森山茂氏蔵本³があり、それらによって内容は僅かながら知られていたが、何れにせよ、原本所在不明のまま、あまり識者の注目をひかなかった。

本絵巻の名称については、内題・外題等を欠き原名称は不明である。ただ絵巻を収納する二重箱に箱書があり、外箱・内箱ともその蓋表に「伏見常磐」と夫々書かれており、伏見常磐の名でよばれてきたことがわかる。東京国立博物館における展覧目録及びその後刊行された同展記念図録「絵巻」⁴には、この箱書によって「伏見常磐物語絵巻」の名称を用いている。

しかし、本絵巻はその内容よりみて、常磐を中心とする物語のみをとりあげて絵巻にしたものではなく、後述するが、浩瀚な平治物語絵巻の零本であることは明らかであり、名称についてはその常磐関係説話の全体に占める割合の多いことから「平治物語絵(常磐卷)」の名でよぶことが最も妥当と思われる。

二 絵巻各段の構成

本絵巻は、詞絵各五段、寸法縦三二・三糎、全長一六・六七米におよび、中世の絵巻一般の体裁から言えば、長い巻物に属する。

詞第一段（第一紙—第二紙）

巻頭であり特に第一紙の磨耗が甚しい。詞と絵の関係からみて、第一紙の前にさらに冒頭に一紙があり、それは破損のため既に失われてしまったとみられる。現存の第一段詞書の大意は次の通りである。

常磐は、母の身を案じ急ぎ帰京、わが家をみるに閉めきって人の気配もない。近所の人に尋ねると、六波羅へ召されてしまったという。涙ながらに、子を引連れて、中宮へ暇申しに参る。中宮からは同情をうけ、また車を用意してくれたので、それに乗り清盛の許へ向った。伊藤武者景綱に預けの身であった母は、やがて放免となった。

絵第一段（第三紙—第一〇紙）

この段は、三景にわかれる。第一景（第三紙—第五紙）は、それに当る詞書を欠くので、平治物語本文（岩波版日本古典文学大系—金刀比羅宮本）によって補ってみると、

寺々の鐘の音、けふもくれぬとうちしらせ、人をとがむる里のいぬ、聲すむ程に夜はなりぬ。柴おりくぶる民の家、けふりたえせざりしも田づらをへだてゝはるかなり。梅花を折て首にはさめども、二月の雪衣に落。瓦のうへの松もなければ、松根にたちやどるべき木陰もなく、人跡はゆきにうづもれて、とふべき戸ざしもなかりけり。ある小屋に立よりて、「宿申さむ。」といへば、主のおとこ出てみて、「たゞいま夜深で少人を引具してまよひ給ふは、謀叛の人の妻子にてそましますらん。かなふまし。」とて

おとこうちへ入にけり。落涙もふる雪も、さうのたもとに所せく、柴のあみ戸にかほをあて、しほりかねてぞ立たりける。主の女房出てみていひけるは、「われらかひくゝしき身ならねば、謀叛の人に同意したりとて、とがめなんどはよもあらじ。たかきもいやしきも女はひとつ身なり。いらせ給へ。」とて、常葉をうちへ入て、さま／＼にもてなしければ、人ごゝちになりけり。二人のをさなき人を左右にをき、一人ふところにいだきてくどきけるは、「あはれ、いとけなきありさまかな。母なれば、われこそ助けんとおもへども、敵とり出しなば、情をやをくべき。少もおとなしければ、今若殿はきるか、乙若殿をばさしころすか、無下にをさなければ、牛若殿をば水にいろるか、土にうづむか、その時われいかにせむ。」と夜もすがらなき悲みけり。松木ばしらにたかすがき、しきもならぬすがむしる、伏見のさになく鶉をきくにつけてもかなしきに、宇治の河瀬の水車、何とうき世をめぐるらん。夜も明ければ、常葉そこをいでむとす。主の男少人々をいとおしみてまつり、「けふばかりは公達の御足をやすめまいらせ給へ。」とてとどめければ、その日もそれに留りて、三日と申せば出にけり。主の男馬鞍こしらへて、常葉のをせまいらせ、少人々をば下人どもにもらせなんどして、をのれもともして木津まで送てかへりけり。「世にあるともきかばたづねよ。我もわするまじきぞ。」とて、小袖を一重とらせければ、「何をか給候べき。公達の御足つゝみまいらせ給へ。」ば申せば、「あるじのかたへ形見に送るぞ。謀叛のものゝ妻子にてあるが、人をたづねて忍ぶ也。あとよりたづぬるものありともしらすべからずといふべし。」とてかへしける。大和国宇多郡龍門の牧岸岡といふ所に伯父のありしかば、たづねてゆきければ、しばらく是にしのびけり。

これによってわかるように、第一景（第三紙—第五紙）は、永暦元年（一一六〇）二月十日、常磐が、義朝の遺児をつれて大和へ落延びる途次、謀叛人の妻子とて、寒さの中、宿もなく困りはてていたところ、運

よく柴の編戸のある家で、女房の情けあるはからいによって、泊ることができ、しかも出発の際は、馬鞍をこしらえ乗せてくれた上、下人をつけ送らせたという箇所にかかる。

絵は、編戸のついた門と、それに続く網代編の桧垣で、画面を斜めに切り構図する。門前の人々は、常磐等の一行である。常磐は、笠・蓑を着け、白馬にまたがる。三人の遺児のうち、最も幼い牛若は、常磐の懷に抱かれ、他の二人今若・乙若は、男女の下人に負われる。門内は、家の一部が霞の中に隠し、人をとがめ吠えたてゐる犬をあらわしている。

第二景（第六紙―第八紙）は、詞書によって、常磐が中宮を訪れる場面であることとわかる。すなわち、常磐は大和で母が清盛に捕われ我身の行方を詮議されていることを伝え聞き、急ぎ帰京し我家をみると締切つて人の気配もなく荒れている様子で、近所の人に尋ねると案の定六波羅へ連れ去られたという。そこで子供を引つれて中宮を訪れ、母を救うため六波羅へ参ずる由申す。後は同情の上、常磐母子を車にのせ清盛の許へ送らせた。

絵は、先ず近衛中宮藤原呈子の殿舎を大きく描く。縁に竹の節のついた格子戸をめぐらし、切妻造の正面、ひらかれた唐戸の中、御廉ごしに語りかける中宮、その前の板敷には牛若を抱き、二児を傍に坐る常磐の姿を描く。殿舎の側面は、格子戸が一枚あけられ、内側に女官二人が見え、下部に何やら運ばせるところ。庭前にも櫃を前に下部の後姿を表わす。これは詞書には略されているが、平治物語本文（前掲本）に、

女院あはれにおほしめし、殿後の出立自せんとて、色々の御きぬを常葉にたび、三人のをさあひ人どものしょうぞくまでもくだされければ、

平治物語絵（常磐巻）について

とあるように、御衣・装束を賜わるところと思われる。次に門前に車が描かれるが、これは詞書にある通り、中宮によって常磐等を送るべく車が手配されたことを示している。

第三景（第九紙―第一〇紙）は、詞書によると、常磐の一行は車で清盛の許へ向い、伊藤武者景綱に預けの身であった母は、その為やがて許されたという。この間の詞書の記述は、頗る簡単に省略されている。

平治物語本文（前掲本）には、

御車をさへゆるされまいらせて、我身子共をもとりのせ、景綱がもとへゆく。

とあり、第三景は、景綱の館をあらわしたものであることがわかる。

絵は、先ず網代編の桧垣と、開かれた門扉の前に休む侍や馬を配し、門内の庭や縁先にも多数の侍達を描く。葺戸を釣り上げた屋内には、常磐と子供、背後に顔に袖を当てて泣く常磐の母尼公、これらに向い合つて坐る人物は景綱と思われる。

平治物語本文（前掲本）によると、

母の尼是をみて、「わがみは老衰たり。今はいく程のいのちなれば、をさあひ人々は御前の命にかはらんとこそ思ひつるに、かへりきてふたゝびうきめをみせんことを悲しけれ。」とぞなげきける。

とあり、尼公の歎きを述べている。第三景は、この様子を描いたものである。

詞第二段（第一一紙―第一二紙）

清盛は、常磐をよびよせた。三人の子を伴つて涙ながらに常磐の云うには、母を救うために参つたが、子供を殺すなら我身を先に殺してから

にしてほしい。常磐は、疲労のため衰えてはいるが、なお人より際立つて美しく、また態度もすぐれていた。

清盛は、義朝に恨みはなきただ勅宣に従っているのみと答え、景綱の許へ預けの身となった。常磐は、子供の処遇についての沙汰を待ち、心細さに観音を祈り、読経を続ける。許された母も家へ帰らず共に孫を案じ歎きつづけた。

絵第二段（第一三紙—第一四紙）

絵は、六波羅の清盛の邸で、右手に棟門と築地塀の一部が見え、前庭には一門の侍等多数が参集する。左手は建物で、画面右斜め上から下へ廊を配し、中程の唐戸が開かれて清盛が坐し、縁にいる常磐母子と対面する。

詞第三段（第一五紙—第一六紙）

二月廿日、世の中も静かになってきたかと思われるうちに、主上と上皇の不和が噂され、上皇は仁和寺を出て八条堀川の皇后宮大夫頭長卿の家へ入った。その家に棧敷があり、上皇は時々棧敷で往来を御覧になっていたが、内裏より使が来て棧敷に板を打ちつけてしまった。上皇はふかくこれを恨み、清盛を召して、主上の側近の経宗・惟方の計事と断じ二人を召捕るよう命じる。清盛は忠誠を誓い、その夜上皇は内裏八条殿の未申にある板屋へ移った。

絵第三段（第一七紙—第一九紙）

絵は、先ず堀川の流れと木橋を行き交う人々を描き、次いで門・築地塀に続く長屋を斜めに配す。大勢の工が長屋の二階棧敷の格子戸を釘で打つけると、門内には廊の外縁や庭先に公家等の話し会うさまを

あらわし、更に奥まった屋内の板敷に、召され馳参じた清盛の後姿を描く。

詞第四段（第二〇紙—第二二紙）

新大納言経宗と別当惟方は、清盛の兵によって内裏で捕えられた。経宗の宿所に於ける戦鬪で、清盛の郎等は多くを失ない、経宗の侍は、雅楽助基光・前武者所信康などあまた討死した。経光は伊藤忠清により、惟方は民部大夫為長によって連行され、京中禁中この事件でもちきりであった。

上皇は、兩人に死罪を行うよう命じたが、前関白藤原忠通は、これをなだめ流罪とし、経宗は阿波国、惟方は長門国へ配流となった。世人はこの結果をたたえ、またこの後天下の治は上皇にゆだねられることとなった。

絵第四段（第二二紙—第三〇紙）

この段は、二景にわかれる。第一景（第二二紙—第二六紙）は、詞書に述べているように、清盛の軍勢が、経宗・惟方を召捕るためその宿所を襲う場面である。

先ず甲冑で身を固め、弓矢を手にした騎馬の武士達が門へ押寄せるところを描き、既に門内では、攻防の戦いがくりひろげられ、討死した者の姿も見える。更に廊の唐戸から殿舎へ攻め入った清盛勢と守備の侍等とが、庭と縁先で烈しく争うところをあらわし、続いて女房達が、あわてふためいて外へ逃げ出す光景を描く。

第二景（第二七紙—第三〇紙）は、経宗・惟方の両名が捕われて、御坪の内に引すえられるところをあらわす。

絵は、先ず門前に蝸集する車馬・兵士等多数を描き、中程には松明で暖をとる姿も見える。門内は、多数の人の見守るうち、武士達にとり囲まれて坪に引据えられる経宗・惟方の後姿と、縁には、立烏帽子に直衣姿の清盛が、御簾の中の上皇と対し、縁先には公家が馳せ参じ居ならぶ。

詞第五段（第三紙）

頼朝が伊豆へ流罪と決ったので、池禅尼は喜んで頼朝をよび親しく語りかける。頼朝は涙ながらに助命になったことを感謝し京を出て配所へ向った。

絵第五段（第三紙）

詞第五段の末尾三字がはみ出して絵の料紙の上に書かれている。絵は池禅尼の邸、縁先で顔に袖をあてる頼朝と、御簾の中には、池禅尼の姿が見える。庭先には侍者二人が坐し、一人は手漉をかむところ。樹木の後には、網代堀を配す。

巻末の一紙（第三紙）には、烏丸光広の次の識語⁵が記される。

この一まきは仁和寺

御むろ法守親王の御手

なりゑはとさのなにかし

と也おほよそ詞なければ

そのことはりきこえかたし

ゑにうつらされはそのあり

さまさたかならすさるによりて

ゑさうしをとりく／＼にひめ

をかせ給ふことはあかしの
中宮むらさきのうへなど

いまもむかしにおなじかる
へし

寛永九年八月十五日おほき

もの申すつかさふちはら（花押）これを
しるすなり

これによると、烏丸光広は、寛永九年（一六三二）八月十五日、この
絵巻を見て、思うところを記したもので、先ず絵巻の筆者については、
伝称によって詞の筆者を仁和寺御室法守親王、絵は土佐某と認めてい
る。法守は、延慶元年（一一三〇）後伏見院の第三皇子として生れ、元
亨元年出家、真言を学び以来南北朝時代を通じて高い位にあって活躍し
たことが知られ、のち明德二年（一三九二）八十四才の高齢で示寂して
いる。しかし後述するが、本絵巻の詞書は、法守の活躍期より遡るもの
と推定され、この伝称はふさわしくないように思われる。

絵の筆者については、ただ土佐某とし名前をあげてはいない。次に、
絵巻というものは、詞書と絵の両方が相まって効果を示す独特な形式
で、これらが珍藏愛玩されることは、今も昔も変りないと記している。
光広は周知の如く和歌・文学に造詣深く、多くの絵巻⁶に極書等をのこし
ており、本絵巻も彼の経目したうちの勝れた作品として奥書に認めるこ
ととなったものであろう。

三 平治物語諸本との異同

次に本絵巻の内容を、他本と比較して、平治物語諸本と如何なる関係
にあるか明らかにしておきたい。

ここで比較するものとしては、代表的な次の四種の平治物語と二種の
史書に限定した。

1 九条家本（学習院図書館蔵）——山岸徳平・高橋貞一編、未刊国文
資料所収

2 金刀比羅宮本——日本古典文学大系所収

3 古活字本（宮内庁書陵部蔵）——同右

4 塩竈文庫本（塩竈神社蔵）

5 愚管抄——国史大系所収

6 百鍊抄——同右

右の諸本については、4を除き改めて解題するまでもあるまい。但し
4の塩竈文庫本は未だ紹介されていないので、ここで簡単にふれておき
たい。

仙台の塩竈神社に、村井古巖（天明六年歿）が奉納した蔵書は、世間
によく知られているが、その中に「保元物語」・「平治物語」各一冊を含
んでいる。繙としてみると、内容は物語本文ではなく、また絵巻の詞書
——絵詞でもない。それは、保元物語絵巻、平治物語絵巻の図柄のみを
精細に記したものである。

それによると、保元物語絵巻及び平治物語絵巻は、上中下何れも各五

巻あり、それぞれ都合十五巻本の体裁をなしていることがわかる。これに関連して想い出されるのは、看聞御記や康富記にしばしば見られる山門秘蔵の「保元絵・平治絵」である。保元絵一合上五巻とあるところから各五巻、上中下を合せて十五巻で、その巻数は塩竈文庫本と一致し、この原本

が或は山門秘蔵本又はその系統のものであったと想像することも可能である。

さて、本絵巻各段について、右にあげた諸本と対比してみると、先ず第一段第一景では、詞書の前半を欠くので、そこは絵の図様のみによって見た。

絵は、網代編の桧垣の塀と編戸の扉を付けた門前に馬上の常磐等を描いているが、九条家本では、竹の編戸とあり、また「道すがらみるものあはれに情をかけて、馬などにて送る者もあり。かちなる者も見すごさず、子供を負いだきて、五丁十丁をくる程に」とその情景を記している。金刀比羅宮本は、柴のあみ戸とあり、「主の男馬鞍こしらへて、常

葉をのせまいらせ、少人々をば下人どもにもらせなんどして」となり、古活字本は、「あやしげなる柴の戸」、「常葉、ひとりをいだきける上に、ふたりの人の手をひき」とあって馬などの記載はない。塩竈文庫本は、「しはのあみ戸」、「ときハを馬にのせ二人の子たちハ下人におふせて」とあり、絵第一段第一景に関しては、金刀比羅宮本と塩竈文庫本に一致している。

第一段第二景は、常磐中宮訪問の場面であるが、詞書では、その前に常磐がわが家を窺うところがある。九条家本・古活字本にもこの部分の記述はあるが、他にはない。第二景については、中宮より装束を賜わる・車をさしむけるの二点の項目にしばられる。この二点とも記しているのは、九条家本、金刀比羅宮本で、前者（装束）のみが塩竈文庫本、後者（車）のみは、本絵巻、古活字本となっている。

第三景の景綱の館の箇所は、詞書・古活字本に記載なく、金刀比羅宮本も尼公の歎きの言葉のみであるのに比べ、九条家本は、尼公が娘や孫達を見て歎くところなど詳しく述べ、塩竈文庫本は、尼公も常磐と一諸に六波羅へ参じており、また常磐一行の行先も、九条家本・金刀比羅宮本が「景綱」の所と明らかにしているほか、詞書では、「清盛がもと」とし、古活字本・塩竈文庫本は「六波羅」となっている。

第二段の清盛邸では、先ず、常磐の子が母に対し泣かないで話すようさとすところがあるが、詞書と金刀比羅宮本・塩竈文庫本が今若、九条家本・古活字本は六子即ち乙若となっている。詞書には見当たらないが、庭前の多数の侍達については、金刀比羅宮本に

「きこゆる常葉こそめし出されて参りたれ。誰かあづかりてうきめをみ

むずらん。いざや常葉がすがたみむ。」とて、平家の一門侍共にいたるま
でみな六波羅へぞ参りける。

とあるところを描いたものであろう。ただ金刀比羅宮本・塩竈文庫本
には母の尼公が同道しているが、絵巻や九条家本にはない。また清盛が
常磐に横恋慕して文を渡す件が金刀比羅宮本や塩竈文庫本にあるが、絵
巻や他本に見られないところである。

第三段は、八条堀川の頭長卿の家で、諸本中、愚管抄、九条家本、古
活字本にその記載をみるが、中でも本絵巻は最も詳細をきわめている。
詞書中の異同をあげれば、例えば絵巻では、上皇が棧敷より「行人の行
きかふを御らむせられけるに」とあるが、九条家本では、「四方の山辺
のかすみわたれる夕けぶりのけしきを観覧」とあり、古活字本は、「行
人の往来を御覧」、愚管抄は、「大路御覧ジテ下スナンド召寄ラレケレ
バ」となっており、金刀比羅宮本はこの項を全く省略するなどその異同
が多い。

第四段は、新大納言経宗・別当惟方召捕の場面で、異同の箇所をあげ
れば、先ず討死した侍として、絵巻では「雅楽助基光・前武者所信康」
を記すが、九条家本では、「雅楽助通信、前武者所信泰」となり、古活
字本は九条家本と同様だが、信康を信安と記している。また他本が配流
の状況まで述べているのに反し、本絵巻は、罪の決定でとどめている。

第五段は、頼朝が池禅尼と対面するところで、詞書では、流罪に定ま
ったので池殿が頼朝を呼んだとあるが、九条家本・古活字本では、流罪
定まって池殿に召され、その後三月廿日伊豆へ出発の暇乞いに再び会っ
ていると記す。従って絵は廿日の暇乞いを省略していることが知られ、

塩竈文庫本も一回の対面のみとなっている。出発の日付は、絵巻は廿日
頃、九条家本・古活字本は三月廿日の暁、金刀比羅宮本は三月十五日と
している。

以上本絵巻と平治物語諸本とを比べてみたが、その関係はきわめて複
雑にいろいろしており、単純に系統を判じがたいものがある。

四 平治絵巻諸本との関係

現存する平治物語絵巻は、摸本で知られる分も含め、次の七種が遺さ
れている。

(1) 三条殿夜討巻 (米国・ボストン美術館)

詞二段絵一段

(2) 信西巻 (東京・静嘉堂)

詞三段絵四段

(3) 六波羅行幸巻 (東京国立博物館)

詞四段絵四段

(4) 六波羅合戦巻

絵残欠十四枚 (諸家分蔵)

詞断簡一枚 (京都・西本願寺)

六波羅合戦巻摸本 (東京国立博物館)

詞三段絵四段

(5) 待賢門合戦巻摸本 (同)

絵三段

(6) 常磐巻摸本 (同)

絵五段

(7) 本絵巻

詞五段絵五段

(1) (3)は、鎌倉時代の製作で、最も著名な作品であり、ここで改めて説くまでもなからう。ただ伝来について言えば、現所有者に入る前は、(1)本多修理、(2)伊勢福島大夫(3)雲州松平家に夫々蔵有されていたことが知られ、成立以来一具であったものが、いつか分れ分れとなっている。

(4)六波羅合戦巻に関しては、原本が既にその形を失い、絵巻から切取られた色紙状の断片十四枚が遺っているに過ぎない。但し、東京国立博物館の白描摸本によって、断片それぞれの原位置を知ることができる。それによると、第一段から四枚、第二段から一枚、第三段から六枚半、第四段から二枚半を切取っており、おそらく絵の保存の良い箇所のみを取って、他は捨て去ってしまったものであろう。詞書も切取られて、手鑑等に貼込まれるなど離散し、そのうち詞第二段の四行分は、京都・西本願寺の手鑑中⁹で見出されている。絵についてはやや画風の違いが感じられるが、詞書の書風は、他の三巻と正に同一であり、成立も一緒のものでなかったかと思われるのである。絵巻の原形が既に失われており、精査の及ばぬ点残念である。

(5)待賢門合戦巻摸本¹⁰は、詞書なく絵のみの抜写本であるが、原本は(1) (4)の平治物語絵と同種であるように思われる。摸写は忠実でなく時代色を加味されているとは言え、構図殊に建築や集団の人物等の表現には、前記平治物語絵に近いことが窺われる。

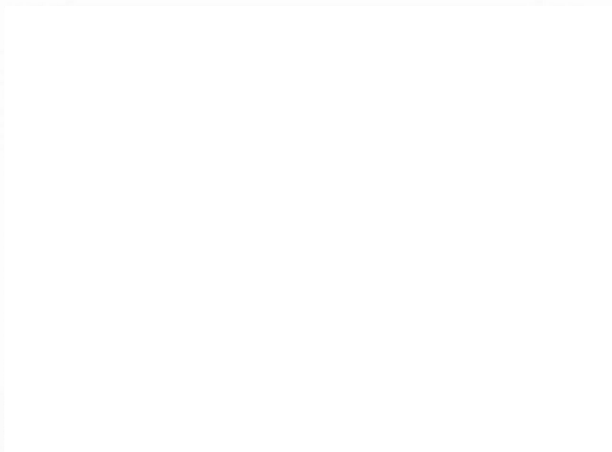
(6)常磐巻摸本¹¹は、待賢門巻同様に詞書はなく絵のみの抜写五段より成る。しかし待賢門合戦巻とは、別種で、摸本ながら様式的に見ると、写しずればあるにせよ、構図や人物の描写など古様な点がみられ、或は平治物語絵巻のより古い一本に拠ったものかとも想像されるのである。五段の内容は、平治物語本文から推して次のように考えられる。第一段は、河原で斬罪がとり行われるところで、中央に上半身裸体で後手に縛られた男を取巻き、騎馬の武者や見物人多数をあらわしている。図柄から推して、悪源太義平が六条河原で打首になる場面と思われる。

東京国立博物館蔵

第二段は、おそらく捕えられた頼朝が、六波羅へ着き、坪に引据えられたところと考えられる。室内には清盛らしき人物など、縁先には侍多数と頼朝と思われる少年の姿がみえる。

第三段以下は、常磐関係の説話をあらわしており、当該絵巻との比較の上で非常に興味深いものがある。即ち第三段は、絵巻第一段第一景と同じく編戸のある門前で、馬上の常磐と子供を抱く下人等を

挿図3 常磐巻摸本 第一段



挿図5 常磐巻摸本 第二段 同



挿図4 常磐巻摸本 第三段 東京国立博物館蔵

描いている。構図は、画面を斜めに切る垣根が、左上より右下へ配置され、人物は左側にあらわされ、両者は正逆の関係、裏返しの構図をとっている。

第四段は、絵巻第一段の第二景と同じく、常磐が中宮を訪れる場面である。ほとんど画面一杯に殿舎がつまり、右よりの縁先には中宮呈子と常磐母子が語り合い、次いで左側車寄に

は、中宮の差廻され、た車が着き、常磐母子が御簾内の女房達と別れを惜しみながら乗り込まんとするところが描かれる。両者の構図は、かなり相違をみせる。

挿図6 常磐巻摸本 第四段 同

第五段は、絵巻の第二段六波羅の清盛邸に当ると思われる。これも構図は著しく異なり正面五間の簾を掲げた建物内部に清盛と対する常磐母子の姿がみられる。



挿図7 常磐巻摸本 第五段 同

以上この常磐巻摸本にみる限り、諸本と系統の異なる一本であることは明らかで、平治物語絵巻がかなり幾種か作られていた事実を示している。これら遺された遺例だけでも、(1)~(5)、(6)、(7)の三系統があり、塩竈文庫本にみる十五巻本を加えれば、四種を数えることになる。

次に絵巻諸本と本絵巻との関係に言及すれば、まず(1)~(5)の五巻のうち原本や断片の存在する(1)~(4)がきわめて問題となる。一筆と推定されるこれらの詞書と、本絵巻の詞書は、書風の点でも全く異なり、また詞書の本文でも、本絵巻が漢字よりも仮名で表現する方法を多く用いているなど、文体の点でも異なることが指摘される。絵については(1)~(4)の各本とも表現に差がみられるが、それらが一つの統一された様式に則っていることは、明らかであり、本絵巻とは自ら表現を異にしている。

(6)については、互に常磐巻という内容であって、しかも別系統であり、また摸本ながら表現手法なども懸隔が感じられ、両者はきわめて興味深い対照を示している。

五 鎌倉絵巻に於ける位置

さて、いままで述べてきたように、本絵巻は、既に知られている平治物語絵巻の何れにも属さない新しい系統の一本と推察されるわけであるが、ここでその製作時期について考えてみることにしたい。

まず本絵巻の様式的特徴について記せば、構図法としては、絵巻本来の横長の画面を最大限に利用し、場面の転換には、空間を以て示すなど、絵巻の伝統的な方法を使っている。建物で画面を斜めに切る構図法や、吹抜屋台を全く用いず、軍勢など人物の布置など東博本等一連の平

治物語絵巻と共通する点もみられ、別系統とはいえ、製作に際し何らかのつながりがあったものと推察される。

技法の面で眺めると、霞は、淡墨線で輪郭し、その線に沿って内側に胡粉線を引き、輪郭の内側は素地のまま塗りのこすという法を用いている。彩色全般については、やまと絵通有のものであるが、殊に人物の着衣は、その多くに細緻な文様を付し、かつ色彩も豊かであり、殊に銀泥の使用の少くないのも特色の一にあげられる。

このような画風を、絵巻の流れの中でどのあたりに置くべきか、という点、まずは鎌倉時代十三世紀後半頃の諸例との比較によって製作の頃は、ほぼ明らかとなろう。しかし本絵巻には山水表現の場を欠いており、部分的な描写の比較は、屋台・人物等に限られるが、第三段及び第五段に僅かながら樹木が描き添えられているので、それらをも手がかりとして比べることができる。

十三世紀後半の絵巻に於て、製作年代の明らかな例は、經典關係を除き、文永四年(一二六七)の馬医草紙(東京国立博物館)、弘安元年(一二七八)の北野天神縁起(京都・北野天満宮)、弘安十一年(一二八八)の山王靈驗記(静岡・日枝神社)等があり、永仁(一二九三~九九)年間は、天狗草紙(東京国立博物館他)、東征伝絵巻(奈良・唐招提寺)等が知られ、正安元年(一二九九)には一遍聖絵(京都・歓喜光寺)が成立している。

本絵巻の画風は、宋元画の影響の色濃い東征伝絵巻や一遍聖絵とは別種で、むしろ伝統的なやまと絵の技法を墨守し、描線・彩色とも調和のとれ、しかも洗練された画風が窺われ、おそらく当代中央の画壇の系統に作者を求むべきと思われる。この画風は、弘安本北野天神縁起をはじ

め、西行物語絵巻（大原家及び徳川黎明会）・平治物語絵巻（東京国立博物館他）などに代表される鎌倉時代十三世紀後半の絵巻の流れに結び付くものである。従って製作の時期も、文永から弘安年間のあたりに位置付けるのが妥当と思われる。

詞書については、その書風は五段とも一筆であり、字詰は後半に行くに従い、数を増している。また片仮名で随所に振仮名が施されているが、これは、後世の書入れと思われる。そのため振仮名には誤読による間違ひも若干みられる。書風や筆師については、今後専門家による詳しい研究が俟たれるが、執筆の時期は、料紙や書風からみて絵と同一の時期になったことは言うまでもないと思われる。

六 結 語

平治物語絵巻は、鎌倉武家社会に於て盛行した合戦絵巻の白眉として、絵巻物の歴史の上で、きわめて重要な遺例である。従来知られた鎌倉期の製作になる東京国立博物館本等の三巻の他に、こゝに零本ではあるが、新たに常磐巻の一本を加えることの意義は甚だ深いものがある。本稿では、当該絵巻の紹介が目的であり、従って内容等を概観するにとどめた。最後に以上述べてきたところを、要約して結語にかえておきたい。

絵巻は、詞五段絵五段、巻初の詞書の一部を失ったと思われるほか、保存状態はほぼ完好である。内容は、平治物語の終末に近い部分で、東京国立博物館本等の三巻が平治物語上中下の内、上にあたるに比べ、本絵巻は平治物語下の内の、しかも終末に近い箇所当る。すなわち、物

語で大和へ落ちのびた常磐母子は、情ある女房の家に一泊するが、絵はその家を常磐一行が発所するところに始まり、京へ戻って中宮に暇乞いをし、次いで六波羅へ参上する。ここで常磐関係説話を終り、次に上皇と主上の不和から、上皇は、側近の新大納言経宗と別当惟方を清盛に命じ召捕らせる。一方既に捕われの身であつた兵衛佐頼朝は、伊豆へ配流と決まり命の恩人である池禅尼を訪れ謝意を述べる。

以上の内容であるが、これを平治物語諸本と比べると、先ず物語本文と詞書の点では、それぞれが互に複雑に錯綜して、にわかに明らかにし難しいが、いずれとも系統を異にする一本であろうと考察した。絵巻諸本との関係では、東京国立博物館本等の平治物語絵巻と、絵の表現形式では共通するものを持ちながらも、描写・様式・画風の点や、詞書の書風・文体などからみると別系統であることを明らかに示す。

製作時期については、他の絵巻との比較から、鎌倉時代十三世紀後半の文永・弘安年頃におかれるのでなからうかと推定を加えた。

本絵巻を書継とする説は、住吉広行の倭錦など（常磐巻は、他にもあり倭錦にあげられたものを本絵巻と断定はできないことは言うまでもない。）にみえており、書継と考えられぬこともないが、しかし詞書の文体など一連のものと異っており、むしろ別系統の平治物語絵巻——巻数もかなり浩瀚な——の一本と考えた次第である。（昭和五十二年七月二十日稿了）

註

1 看聞御記 応永卅二年十一月四日

晴、玄忠参。一樽持参。抑真乗寺殿常磐絵二篇賜之。殊勝絵也。詞筆跡白河三位経朝卿云々。行豊見之彼卿筆跡之由申。此絵真乗寺所持云々。

2 本朝畫図目録（徴古館本）

常盤之卷 一卷 画土佐伊与守隆成 詞御堂法守親王

奥書光広卿 保元平治の零卷なるへし

倭錦

光顯

一直幹申文草子詞慶運法師

一弘法縁起残缺 一木筆不動

一木筆三十六哥仙色紙和歌

一平治物語書繼 一哥仙残缺哥慶運

知恩什物

一法然四十八卷伝内数段

3 鈴木敬三氏 「初期絵巻物の風俗史的研究」昭和三十五年 吉川弘文館。及び秋山

光和氏の御示教による。

4 特別展図録「絵巻」昭和五十年三月二十五日発行 東京国立博物館

5 この識語に句読点を加え、段落を付し、仮名を漢字に改めてみると次の如くである。

比の一卷は、仁和寺御室法守親王の御手也。絵は土佐の某と也。

大凡、詞なければその理きこえ難し。絵に写らざれば、その有様定かならず。絵草

子を、取々に秘め置かせ給う事は、明石の中宮・紫の上など今も昔に同じかるべし。

6 光広奥書の絵巻を年代順に表記してみた。なお光広の花押は各種あるが、同じ時期

の伊勢新名所歌合絵奥書にみるものと同一である。

寛永第七季秋上澣 西行物語絵巻（毛利家）

寛永九年八月上澣 七十一番歌合摸本

寛永九年八月十五日 本絵巻

寛永壬申仲秋日 伊勢新名所歌合絵

寛永丙子小春上旬 伊勢物語絵摸本

寛永十三年霜月上旬 吉備大臣入唐絵

寛永丁丑林鐘凉天 三十六歌仙絵摸本

（年記のないもの） 天狗草紙摸本

7 塩竈文庫本平治物語上中下のうち、常磐関係説話を含む本絵巻に当る箇所は、下のうちの「四巻頭」以下巻末に到るところまでであり、参考のため右の箇所の全文を掲げた。

平治物語絵（常磐卷）について

塩竈文庫本平治物語下（抄）

四巻頭

廿四ゑ 二月九日ときハ三人の子ともを引ぐしてきよミつにまいらるゝ夜也つ夜也

廿五ゑ ときハ二人の子をつれ一人いたきてあかつききよミつをいてらるゝ也二月十日雪ふり風ふく

廿六ゑ ときハ小袖をときて二人の子のあしをつゝミ小袖を二人の子のうへにかふせて風あらし方ニたちて二人の子のなくをなくさめてふしミのおはの門をいて行たまふ雪ふる也

廿七ゑ ときハ右之ことくにて夜に入しはのあミ戸にかはさしあてなく所に内より女見ていたわしといひて内に入るゝ也雪ふる

廿八ゑ 松柱に竹すかきむしろのうへに火をたき二人の子をあてなくゝ物語などあり右同家也二月中

廿九ゑ ときハを馬にのせ二人の子たちハ大人におふせてわが身もともしてきつまでおくる正月十四日

三十ゑ ときはの母を六はらへつれ来りてとハるゝ也後ごう問ニおよぶ二月中

卅一ゑ ときハ三人の子をつれて九条の院へ参さいこのしやうぞく上下子共ニもしやうそく上下也女院御あはれミある也二月中

卅二ゑ ときハ二人の子一人ハいたき六はらへ行たまふ也なくゝのたまふことハきこへす今わかぬいふ也母のにこうもときハかうしろにゐてなく所也

卅三ゑ ときわのもとへきよりのふミあり母にこうかくゝおほせるしたかへと申所也二月中

五巻頭

卅四ゑ これつねこれかた二人からめとりて御つほの内に引すへたり公卿殿上人せんきありきよもりも参内せし也二月廿日

卅五ゑ 新大納言つねむねあはの国になかされて哥よミゐたまふ所也

卅六ゑ 別当これかたなかとのはまにて哥よミてかく所也

卅七ゑ 源中納言師仲八つはしになかされて哥よむ所也

卅八ゑ なんハの三郎滝つほ入あかりて僧にありさまかたりすいしやうのとうに佛しやりを入てたまはりたるを僧に見するおかむ所也

紙継寸法一覧
(単位：cm)

紙数	寸法	
第1紙	46.7	詞
第2紙	43.2	〃
第3紙	47.0	絵
第4紙	52.3	〃
第5紙	52.5	〃
第6紙	51.9	〃
第7紙	52.6	〃
第8紙	52.7	〃
第9紙	51.8	〃
第10紙	51.8	〃
第11紙	50.3	詞
第12紙	47.5	〃
第13紙	52.1	絵
第14紙	52.0	〃
第15紙	51.0	詞
第16紙	43.0	〃
第17紙	51.5	絵
第18紙	52.5	〃
第19紙	51.8	〃
第20紙	50.6	詞
第21紙	44.5	〃
第22紙	51.8	絵
第23紙	52.7	〃
第24紙	52.5	絵
第25紙	52.6	〃
第26紙	52.5	〃
第27紙	52.3	〃
第28紙	52.6	〃
第29紙	52.7	〃
第30紙	52.0	〃
第31紙	51.6	詞
第32紙	51.0	詞及絵
第33紙	44.0	奥書
	1667.6	
縦	32.3	

卅九条 なんばの三郎馬をひかへて太刀ぬきかさしてらうどう以下松の下にたちよりけるにいかつちにむまともにくころされてけり

四十条 よりともをいけのあまめしよせつく／＼と見てなミたをなしかしたかに御いとまあり

四十一条 よりともりの中の八満くうにいとま申らんとて平兵衛にとひたまふ也けんぶつ人ありものゝふとも申へし

四十二条 よりともいつの国になかしおくりて北条いとうに御所ありけいこ申おきて御いとま申かへる

8 看聞御記 永享八年五月卅日

保元絵一合^{上五}卷。重仲持参。件絵銘事申。再三雖令故障。中山宰相中将執申。就貴所望申之由懇切申之間。心弱領状了。仍絵入見参。殊勝絵也。西塔北谷ニ有之。たくまか筆云々。山上秘藏絵云々。平治絵ハ西塔南尾ニ有之。市筆云々。殊勝絵也。秘藏之間繪旨院宣之外ハ不出云々。

同 閏五月四日

晴。保元絵銘銘染筆遣之。上横先返遣。中山中納言以重仲難去申之間。乍比興書遣。山門秘藏之絵云々。内裏御絵寫事番匠ニ仰付。

同 九日

重仲保元絵二合中下。持参。銘事畏申。

同 十三日

先召置保元絵返遣。

同 永享九年六月廿三日

晴。法輪院参。対面雑談。平治絵ハ山門秘藏。繪旨。院宣。御教書ならてハ不出云々。

康富記 文安五年七月十日

山門之保元絵^{十五}卷。自座主^{門毗沙}堂。被申成繪旨被借寄、近日可被返遣山門也、内々自上

乗院借請申一見之間、可被見之由示送之故也、予読絵詞了、

9 田村悦子氏「平治絵卷六波羅合戦卷詞書の断簡について」美術研究二五二号（昭和四十二年度第一冊）

10 考古画譜には、待賢門合戦^{松山}候藏、として、土佐光頭平治物語書継の項にあげている。

11 考古画譜の同じ項に、常盤卷^{藤家内}とあり、また別項に「真頼曰、光頭の書継平治物語は、所謂常磐の卷なり、」とみえる。また栗原信光の「柳菴隨筆初編」に余が見し所のものとして列挙した中に「慶恩六波羅行幸、常磐の卷、二つともに保元平治の零本成べし」とあり、その各々が何れに当るか錯綜して明らかでない。しかし、このうち内藤家本は、明治三十年頃関保之助、川崎千虎両氏が実見したといわれるが、詳細及びその後の消息は不明である（鈴木敬三氏前掲書）。

本稿をまとめるに際し、コロンビア大学村瀬実恵子氏の慇懃と、田中一松氏・秋山光和氏・柳沢孝氏・田村悦子氏から懇切なる御示教に授かった。記して感謝の意を表する。

詞書

- 一、改行はそのままとした
- 二、句読点を新たに入れた
- 三、□内の文字は森山本により補う

ときはこれをつたへきゝて子共□

しゝても、とし老たる母のいためられ

むうへは、いかてか、かくてあるへきと

おもひければ、いそぎ京へかへりて家

を見るに、たておさめて人なし

いつしか、あれにけるも、あはれなり

ちかきほとものに、たつねければ

すきにしころ、六波羅へめされてま

りき、といへは、されはよ、とかなしくて

いとゝなみたにくれつゝ、子共を引

具して、中宮へまいりて申やう、子共の

かなしさに、たちのひて侍りつれとも

としおいたる母を、めしこめて、いため

とはれ侍なれば、われいてゝかはり

侍へし、と申ければ、后よりはしめたて

まつりて、宮の中の人々、みなそてを

しほりけり、子共もいたいけして

いふなるさまなりければ、あれらを

うしなはむすらんことよ、とてあはれ

かりあひたり、さて尋常にひきつく

ろひて、車めしのせなとして清盛か

もとへつかはさる、伊藤武者景綱に
あつけらる母は、やがてゆりにけり

〔絵〕

清盛朝臣ときはをめしいたして見る、三人

の子を、二人をはさきにたてゝ、一人をは

いたきてまいりたり、ときは申様、この子共

なのめならず、かなしくて、もしやとたち

しのひ侍つれとも、母をめしましめらるゝ、

とうけ給候へは、あまたの子共をこそ、うし

なはめ、母をはいかにくるしめ侍へき、と

思てまいりたり、たゝし義朝つみふかく

て、その子共うしなはるへきならば、まつ

我身を、ともかくもなされてのち、子共を

うしなはるへし、あれらをうしなはれて

のち、かた時たちのふへからず、子共をいけ

させたまへ、と申さはこそかたからめ、われ

をとくうしなはせ給へ、それはうらみにて

候まし、となみたもかきあへず申ければ、

あにの今若いひけるは、なかつてうるはしく

申せかし、といひけるそ、おさなきほとに

けしうはいふものかな、と聞人したをふり

ける、ときはいろかたちことにすくれたりける

か、ななき日数へて、やせおとろへ、みとりの

黛 くれなゐのなみたにみたれつゝ

そのものとも見えすなりたれとも、猶人には

すくれたり、宮仕してひさしくなりたれ

は、物なれたるうへ、口きゝてつまひらか
に申ければ、まことにさこそ思らむ、と聞

てあはれ也、清盛申けるは、義朝わた

くしの敵にあらず、されは意趣あるへからず

勅宣をうけ給て、奉行するはかりなり

上の御はからひにこそしたかはむすれ、よ

きやうに、はからひ申へし、とて景綱かもと

にあつかりたりけるを、つほねたひてすゑ

てをかれたり、かゝるにつけても、子共を

ひきはなちて、うしなはむするやらむ、と

かなしく覺て、観音に念し経をにきらへ

てよみゐたり、母はゆりたりけれども、孫とも

の事おほつかなさに、家へもかへらて、おな

しまくらに、ふしゝつみてそふける

〔絵〕

廿日かくて世もやうくしつまるかとおもふ

ほとに、主上と上皇と御中心よからすと

いふ事きこゆ、上皇仁和寺よりいてさせ

給て、皇后宮大夫頭長卿、八条堀川家に

わたらせたまふ、その家に棧敷ありけり

上皇時々かさしきにして、行人のゆき

かふを、御らむせられけるに、内裏より

御つかひまいりて、うちつけられにけり、その

ほか、世の政、主上の御はからひにて、上皇

しろしめされぬことにてありければ、

上皇ふかく御うらみありて、清盛をめし

て仰あるやう、主上はいまたおさなくおは

します、これほどの御はからひあるへから

す、ひとへに経宗惟方二人か計なり、信頼

か悪事をくはたて、世のみたれをしいた

し、あやまたぬ信西をうしなひしも、

彼兩人かはからひなり、我に心さしあらは、

かの二人をめしとりてまいらせよ、とおほ

せらる、清盛申云、保元の兵乱のとき

一類家弘をはしめとして、おほく讃岐院

の御かたに候き、しかれとも故院の御遺

言そむきかたく候て、君の御かたにまいり

て、さきをかけて逆徒をせめおとし候

にき、君の御大事に命をすつる事、

すてにたひくになり候ぬ、又いまも

おほせをそむくへからす、と申けり、上皇

やかて其夜当時の内裏八条殿の、ひつ

しざるなる板屋へ、わたらせたまふ

前関白も参せられけり

〔絵〕

清盛朝臣、新大納言、別当をからめしむ、

兩人共内裏に侍けり、大納言宿所に命を

おしますふせきたゝかふ物ありて、清盛

か郎等おほくうたれたり、大納言の侍に

雅樂助基光、前武者所信康などあま

たうたれにけり、大納言をは伊藤馬允忠

清か、手にとりてまいれり、別当は民部

大夫為長具してまいれり、京中も禁

中も、又さはきのゝしる事おひたゝし

上皇ことに、やすからすおほしめしければ、

兩人共に、死罪にをこなふへきよし

仰られけるを、前関白しきりに、なため

申さる、本朝には、嵯峨天皇よりこのかた

死罪はとゝめられて、廿五代にをよふ、一

とせ先例をそむきて此事あり、人

これをかたふけていはく、死罪をゝ

こなはるれば、謀反のともから、たふへから

すと申ける、はたして、いくほとをへすし

て去年大乱いてきたり、中にも此二人

させる弓箭とるものにあらす、流罪にて侍

へし、遠流の罪は、ふたゝひかへらす、死罪

おなし、とくはしく申されければ、新大納言

は阿波国、別当は長門国へなかさるへき

になりぬ、これをもれきく人は、めてた

く申させ給ものかな、これ世のため君の

ため臣のため也、大織冠淡海公より

このかた、君の御うしろみにて、ひさしく

ならせたまふ、ゆくすゑもはるかに、さか

へさせ給はむすらむ、とそ申あへる、さて

天下のことは、上皇しらしめすへきに

なりけり

〔絵〕

兵衛佐頼朝、流罪にさたまりにければ、池

殿ことによるこひて、頼朝をよひていふ様、

わかくより、心よはき身にて、人のいのちを

おほくいけたりき、いまは、この世には人の

かたうとすへきにあらす、それにしかるへき

ことにや、申侍つかひありて、なためられ

給へは、しはらくの逗留もあるへからす、

いそきくたり給へし、といふ、頼朝なみたに

むせひつゝ、やゝひさしくありていふ様、去年

三月一日母にをくれ、今年正月三日父をうし

なふ、いまはあはれをかくへきものも候は

す、果報のつたなきことを存候へは、かひな

きいのちあるへし、とも覚侍らさりつるに、

御あはれみによりて、首をつきて宮こ

をいて侍りなむこと、世々生々に報しつ

くしかたし、と申もあへすなきけり、まことに

さそおもふらむ、とあはれ也、さて池殿たひの

よそい国にていらむする物まで、こまかに

さたせらる、廿日ころにそ京をいてける、伊豆

国ひるかしまといふ所にあるへし、と仰下さる、

人の配所へおもむくは、なけきにてこそ

あるへきに、これはよろこひにてありける

となん。

〔絵〕